

# 「戦争に抗う福祉文化の視点とは何か」に関する試論

～パブロ・ピカソの『ゲルニカ』とアインシュタインとフロイトの書簡を手がかりにして～

## The Human Welfare and Culture's Anti-war Point of View

—Pablo Picasso's "Guernica" and the Correspondence between Letter of Einstein and Freud as Clues—

結城 俊哉  
YUKI, Toshiya

### 要約

人はなぜ戦争をやめないのか。本研究は、人間が生み出した戦争文化に抗するための福祉文化の対峙方法についての試論である。研究手法としては、パブロ・ピカソの『ゲルニカ』とアインシュタインとフロイトの書簡を素材にして「福祉文化論」としての検討を試みた。具体的には、『ゲルニカ』はピカソが祖国スペインのゲルニカ空爆を知った衝撃から生まれた作品であり、アインシュタインとフロイトの往復書簡はその数年前のものである。その後、20世紀は「戦争の世紀」と呼ばれたが、21世紀の現在においても未だに我々人類は、「平和な世界」を実現していない。本稿は、戦争という非福祉的行為に抗うために私たちが、何をなすべきなのかについて共に考える手がかりを提案するものである。

キーワード：ピカソのゲルニカ、戦争の世紀、アインシュタイン、フロイト、福祉文化

### Abstract

This study will examine why people do not end war, and how to confront *the welfare culture* (=The Human Welfare and Culture) in order to counter culture of war produced by humans. As a research method, we will examine the "welfare culture theory" using Pablo Picasso's "Guernica", and the Einstein and Freud letters. "Guernica" is a painting Picasso created driven the impact of the bombing of Guernica in his motherland Spain. The correspondence between letter of Einstein and Freud occurred a few years prior to the Picasso painting. The 20<sup>th</sup> Century has been called "the century of war," but even now in the 21<sup>st</sup> Century, humans have not been able to bring about a "peaceful world." This paper proposes clues for considering what can be done to resist non-welfare acts of war.

**Key words:** Picasso's "Guernica", the century of war, Einstein, Freud, welfare culture

## はじめに：本試論の目的

本研究の目的は、「文化の担い手」としての芸術家（ピカソ）に対して「戦争（ゲルニカ空爆）」が与えた影響とは何か。そして、二人の科学者（アインシュタインとフロイト）が交わした書簡を手がかりに1930年代における戦争論が21世紀の現代に与える意義について「戦争」と「平和」をめぐる「福祉文化」の視点とは何かに関してその本質を問い直すことを目的とした試論である。

### Ⅰ. 研究の視点と方法

本研究の基本方針は、1934年にスペインを離れてフランス・パリに在住していたパブロ・ピカソ（1881～1973）が、祖国スペインで共和国と反乱軍が対立するなか「ゲルニカ（バスク地方の小都市）」への、ナチス・ドイツ空軍による3時間にも及ぶ「空爆」で廃墟と化した事件（1937年1月）に衝撃を受け、パリ万博（1937）に向けて急遽作品『ゲルニカ』の悲劇を描いたことは知られている。この作品が、鑑賞する者に今もなお与え続け問題提起する現代史における「戦争と平和」の問題について検討し、「戦争文化」に抗う「福祉文化」の社会思想的な立場を明らかにする。さらに、アインシュタインとフロイトの書簡（2016）『ひととはなぜ戦争をするのか』（講談社学術文庫）の中で、アインシュタインからの問いかけに回答として返信を書いたフロイトの人間の欲動に基づく「戦争に抗するための文化」についての言説を検討しながら、「福祉文化」とは何かについて提案を試みたい。

その意味で、本研究は、「戦争」という非福祉的行為に対抗する「平和」を導くための「福祉文化論」に位置する。

### Ⅱ. 戦争文化が『ゲルニカ』の誕生へのパブロ・ピカソに与えた影響

#### 1. 文化と文明をめぐる戦争と福祉の関係

##### 1) 「文化と文明の定義」について

文化（culture）と文明（civilization）の相違についてその定義に関してははじめに考えておきたい。

【文化（culture）】とは、「人間の生活様式の全体。人類が自らの手で築き上げてきた有形・無形の成果の総体。それぞれの民族・地域・社会に固有の文化があり、学習によって伝習されるとともに、相互の交流によって発展してきた。カルチャー。…（中略）…特に、哲学・芸術・科学・宗教などの精神的活動、およびその所産。物質的所産は文明とよび、文化と区別される。…（中略）…（用法）「文化」と「文明」の使い分けは、「文化」が各時代に渡って広範囲で、精神的所産を重視しているのに対し、「文明」は時代・地域とも限定され、経済・技術の進歩に重きを置くというのが一応の目安である。……（以下略）」

[デジタル大辞泉・小学館]

次に「文明」の意味についても以下に記載しておく。

【文明 (civilization)】とは、「人知が進んで世の中が開け、精神的、物質的に生活が豊かになった状態。特に、宗教・道徳・学問・芸術などの精神的な文化に対して、技術・機械の発達や社会制度の整備などによる経済的・物質的文化をさす」 [デジタル大辞泉・小学館]

以上のように「文化」は、精神面に比重のおかれた生活様式の所産であり、それに対して「文明」は、技術・経済の進歩が地域・時代に限定された栄枯盛衰する文化の形態である。その意味では、文明論を語ることよりは文化論についての考察を深めることの方が普遍性を内包した視座を獲得できるものであると理解できる。

本稿では、「文明」ではなく「文化」の視点に立脚して検討と議論を展開していくことにする。

## 2) 戦争文化と愛国心の関係について～歴史における戦争論と愛国心～

歴史 (学) とは、人間社会が経てきたある事物や出来事の現在に至るまでの変遷や発展の経過であり、その記録を研究する学問のことである。そのため、現存する資料 (手紙・新聞・手記等)・遺蹟 (物・建造物・遺蹟跡等) が事実の有無も批判的に検証する資料となる。

しかし、現存する古い歴史ほど、権力者の都合の良い形に改変されながら語られるものである。この点については、歴史研究者が極めて細心の注意を払う部分でもある。今回のテーマとなる歴史上の戦争という人間の犯した罪を語る時、戦争を人間の文化がもたらした「非 (反) 福祉的行為」とであると定位する。つまり、「戦争文化」は、個人の中に「愛国心」(patriotism) という精神性が組み込まれたことにより人間の歴史あるいは個人の生活史 (ライフヒストリー) に極めて陰鬱な語れない影を落とす。

しかし、「愛国心」とは「自分の国を愛し、国の名誉・存続などのために行動しようとする心。祖国愛」[デジタル大辞泉・小学館] である。この『愛国心』は、戦前・戦中にかけて少年・少女を対象に学校教育の中で展開された軍国教育によるマインド・コントロールのようなものだった。そして、1945 (昭和20) 年の8月15日 (現在・終戦記念日) を境に、マインド・コントロールから解放された日本国民は、「基本的人権・国民主権・平和教育が重要なのだ」と学校教育の現場における教育方針も180度転換した。敗戦は戦中・戦後を生きた人々が内心抱いた違和感・疑念からの解放と希望 (= 価値観の転換) でもあったのだ。

また、近年では戦争文化がもたらす悲劇的な現実について、戦後70年 (2015年) を境として「戦争の記憶」を風化させない取り組みが今も積極的になされている。例えば、戦後100歳のジャーナリストとして最後まで「戦争が犯した人間の罪」について糾弾し続けた、むのたけじ (1915年～2016年/101歳で逝去) の一連の講演・著作や、『戦場体験者：沈黙の記録』(2015年、筑摩書房) を刊行した保坂正康、『戦争と福祉についてボクらが考えていること』(2015年、本の泉社) の大田昌秀・山城紀子等、『戦争する国、しない国：ふくしの思想と福死の国策』(2016

年、新日本出版社)の浅井春夫、『戦争まで：歴史を決めた交渉と日本の失敗』(2016年、朝日出版社)の加藤陽子、そして戦場という極限状況におかれた兵士達の悲惨な現実を歴史資料から再現した『日本軍兵士：アジア・太平洋戦争の現実』(2017年、中公新書)の吉田裕、『戦争文化と愛国心：非戦を考える』(2018年、みすず書房)の海老坂武などの研究成果がある。

以上の書籍等を読み込むほど、読者の多くは、おそらく、戦争文化の中で生きることを余儀なくされた多くの人々にとっては、戦後70年以上を経た現在も、その暗く自らも目を背けなくなる悲惨な体験や心的外傷(トラウマ)は、癒えることなく自らの人生の中に暗い影(過去)を落としていることが再認識できることだろう。

## 2. ピカソの『ゲルニカ』が意味すること

～文化の担い手である芸術家の作品(仕事)から学ぶべきこと～

### 1) パブロ・ピカソ(Pablo Picasso)という芸術家

パブロ・ピカソ(1881～1973: 逝去・91歳)は、生涯の大半をフランスのパリを中心として過ごしたスペイン出身の画家、彫刻家、版画家、陶芸家、舞台装飾家、詩人、劇作家である。彼は、20世紀で最も影響を与えた芸術家の一人で、表現主義的な象徴性を特色とする「青の時代」、叙情性が花開く「ばら色の時代」へと進み、その後、ジョルジュ・ブラックと共にキュビズム(cubisme)の創立者として芸術界の新境地を切り開いた。その後もキュビズムによるさらなる表現の可能性を追求したり、コラージュの再発見など、幅広く創造的な芸術活動を生涯精力的に実践した天才芸術家として知られている。

彼自身は、生涯で約1万3500点の絵画、10万点の版画、3万4000点の挿絵、300点の彫刻と陶器を制作し、最も多作な美術家と記録されている。代表作は、キュビズム黎明期の「アヴィニヨンの娘たち」(1907年)や、スペイン市民戦争(内乱)における反乱軍のフランコ將軍を揶揄した「フランコの夢と嘘」(1937年1月)、さらに、ドイツ軍によるゲルニカ空爆への抵抗を描いた「ゲルニカ」(1937年6月完成/パリ万博(5月25日開催:スペイン館展示依頼作品)である。その直後から「泣く女」を作成。モデルのドラ・マールは、「ゲルニカ」の制作現場を撮影した女性写真家である。

ピカソをはじめ、アンリ・マティス、マルセル・デュシャンの3人は、20世紀初頭の視覚美術に革命的な発展をもたらし、絵画のみならず、彫刻、版画、陶芸など幅広い美術分野に影響を与えたことで知られている。1950年代にピカソのスタイルは再び変化し、古典巨匠作品の再解釈とオマージュのような作品を制作し始める。1968年から1971年まで、何百もの絵画や銅版画を積極的に制作。ピカソの死後、80年代に新表現主義が流行り始めると、晩年のピカソの作品は注目を集めることとなった。尚、日本でも箱根の彫刻の森の中に『ピカソ館』があり、彼の作品の数々を鑑賞することができる。

このように、ピカソの芸術を時代が追いかけるという現象が20世紀の芸術界だった。

次に、時系列的に『ゲルニカ』誕生までの軌跡をたどってみることにしたい。

## 2) 『ゲルニカ』制作の発想としての『フランコの夢と嘘』

1936年にスペイン人民が選挙で選んだ共和国政府に対してフランコ将軍と軍部の一部が反乱軍として7月18日にスペイン共和国に攻撃（クーデター）を企てるという事態が発生した。その後、スペインは3年間に及ぶ市民内戦状態に陥り、40万人以上の犠牲者をだすことになった。ヒトラーのナチス・ドイツとムッソリーニのイタリアの軍事的援助を受けた反乱軍が1939年の春に勝利したことでフランコ将軍による独裁政治がその後40年近く続くことになった。そして同年の夏には第2次世界大戦が始まりを告げたのである。

ピカソは、政治的な発言をしないことでも知られていた。しかし、彼が祖国スペインの当時の国内情勢について極めて気にしていたことは、この『フランコの夢と嘘』というフランコ将軍を揶揄（＝ファシズムと暴力への抗議）する銅版画（エッチング）をみれば十分に理解可能だ。つまり、この作品にピカソが抱いていた当時の祖国に対する痛ましい混沌とした思いを読み取ることができる。反フランコの立場のピカソ自身は、その点について直接的な発言することはなかったのだが、この銅版画の中に偶然だが、ピカソの『ゲルニカ』で描かれるモチーフの断片をうかがい知ることができる。

1937年1月ピカソの『フランコの夢と嘘』



出所：<https://www.musey.net/2689/> (2018年10月19日)

## 3) 「ゲルニカ空爆」の知らせは、何をピカソに与えたのか。

ここで、当時、芸術の創造主的評価を受けていたピカソの「人間の愚かさ」と痛みへの抵抗」について今一度、考えてみたい。5月1日にピカソの手元に届いた「ゲルニカ空爆」による惨禍の様子を伝えた「ス・ソワール紙」朝刊に掲載された紙面と写真に彼は釘付けになったと言われ

ている。筆者の解釈では、この瞬間ピカソの内面を撃ち抜いた「ゲルニカ空爆」の衝撃が、開催が迫るパリ万博<期間5月25日～11月25日／テーマ「現代生活に応用された芸術とテクノロジー」>のスペイン館入り口正面に展示されることになる『ゲルニカ』制作の原動力になったことは確かなことだと思う。

なぜなら、ピカソに「憤怒・悲惨・悲痛」を伴う感情のカオスの中から代表作『ゲルニカ』を生み出すインスピレーションを与えた「ゲルニカ空爆」の様子について、アラン・セル（Alain Serres）は以下のような描写で表現している。

1937年4月26日、16時30分、スペイン北部の小さな町ゲルニカの空が暗くなる。バスク人の町の鐘が奇妙になり始める。15分後には最初の飛行機が広場、道路、建物に爆弾を落とす。ドイツのコンドル軍とイタリアの爆撃機からだ。

月曜日のこの日はゲルニカの市場が開かれる日だ。近隣の村から人々がニワトリ、野菜、家畜の肉の売り買いに集まっている。最初の飛行機にたけり狂った若い牡牛があちこち逃げまどう。人々はパニックを起し、避難しようと家に走り込む。爆弾の雨が降る。屋根が崩れ落ちる。火災が建物に次つぎ広がる。

5分ごとに爆撃機が低空飛行で町の上空を飛ぶ。いくつもの家族が近くの森に逃げる。その人たちに向かって飛行機から機銃掃射する。恐怖の3時間15分、50トンの爆弾、3000発の焼夷弾。

この小さな町の大きな議事堂にはバスクの人々の歴史、法律が刻まれた記念碑がある。

バスクのシンボルであるこの議事堂の中庭に一本の樫の木が立っている。各地のバスク人を何百年にも渡って結びつけてきた木、ゲルニカの木（ゲルニカ・アルボラ）だ。

19時45分、最後の飛行機が飛び去る。

町は焼かれ、ほとんど廃墟と化す。

教会が建っている。バスクの議事堂とゲルニカの木が立っている。

しかし、男や女たち、そしてかれらの子供はいったいどこに？

ゲルニカとその周辺の住民数百人が殺され、負傷する。

世界が呆然となる。町の4分の3が破壊されたのだ。

このゲルニカの空爆が軍人ではなく、武器を持たない一般市民をねらった人類史上初の出来事として記録される。

(Alain Serres 2007 =2012 : 18-20)

繰り返すが、このゲルニカ惨禍の様子についてピカソは、「ゲルニカ空爆」による無差別爆撃という戦争行為は、世界で最初に行われた近代戦争の到来を告げる悲劇だったと述べている。

まさにその後の戦争のやり方は、相手国内への空爆作戦を実施し、戦局を確認しながらの地上戦となる。太平洋戦争時の日本でも、東京大空襲をはじめ、全国各地で行われたB29爆撃機によ

る空爆と終戦を決定づけた広島・長崎の原爆投下を受けている。

21世紀の現代は、テクノロジーの進化によりドローン戦闘爆撃機を用いて軍事基地内からの遠隔操作による空爆作戦も用いられている。(2014年に『ドローン・オブ・ウォー』がアンドリュー・ニコル監督によって制作上映されたことは記憶に新しい。)

その意味では、「ゲルニカ空爆」の悲劇を描いたピカソの『ゲルニカ』という作品は、現代の戦争文化の未来を予言したものだという理解も成立する。

#### 4) 『ゲルニカ』に描かれていること。

次に、ピカソの『ゲルニカ』という作品を理解する手がかりは、その当時、彼の愛人であり写真家でもあり、ピカソの作品『泣く女』のモデルでもあったドラ・マール(1907~1997)の存在が大きい。ピカソの許可を得て彼女が撮影した『ゲルニカ』制作過程(I~VII)の記録写真が残されていることで、ゲルニカ空爆を知った5月1日から『ゲルニカ』の構想が始まり、6月4日の完成に至るまで不眠不休でピカソが情熱を込めたこの作品の誕生の秘密を理解することができるのだ。

フランスの美術批評家であるピエール・カバンヌ(Pierre Cabanne)は、戦争と美術の関係について1937年12月19日の『ニューヨーク・タイムズ』紙にピカソからのメッセージを次のように紹介している。

私はずっと信じ、今なお信じていることを皆さん方に思い出していただきたいのです。精神的価値を尊重しながら生き、そして制作している画家たちが、人間性と文明の価値を危険にさらすような戦争に対して無関心でいられるはずがないということ。

(Pierre Cabanne 1979=2016: 48)

その当時、スペインの首都マドリードのプラド美術館の館長(1936~1955)でもあったピカソにとって戦争によって失われる美術作品があることは自分の身を切るような「痛み」を実感していたに違いない。しかも、1940年~1944年の5年間は、ドイツの支配化にあったフランスのパリでピカソは「退廃的芸術家」とみなされ作品の公開展示が全て禁じられた状況におかれることになる。しかし、その期間でも作品制作は続けていたのだ。

『ゲルニカ』(1937年)という作品は、今から80年前に制作された絵画だが、その作品を現代に生きる私たちは、どのように鑑賞し読み解くことができるだろうか。確かに芸術(アート)の解釈に正解は無い。しかし、この『ゲルニカ』と題された絵画を描いたピカソの心情や込めたメッセージについて誰もが自由に理解したこと、感じたことについて発言することは許されている。ピカソ自身は、この作品の解釈についてあえて何も語ることをしていない。まさに、芸術は「自由」であるべきものなのだ。その点を確認した上で、筆者なりの『ゲルニカ』について現時点における解釈を試みてみたい。

## 1937年パリ万博・スペイン館展示作品『ゲルニカ』



現在、スペイン・国立ソフィア王妃美術センター所蔵・縦：3.5m×横：7.8m／出所：<https://www.musey.net/artist/5/> (2018年10月21日)

白と黒のモノトーンの『ゲルニカ』に描かれているのは、向かって左から沈黙したまま、じっと鑑賞者を見つめる牡牛と死亡したと思われる子供を抱きかかえて天を仰ぎながら号泣している母親。そして中央には、槍で刺され腹が裂かれ左側を向きながら嘶く馬とその下敷きになったかのように男（兵士？）が左手を開き、切り落とされたような右手には折れた剣と花を握りしめている。馬の頭部付近には、空爆を象徴するような電球の光とそれに、抵抗するかのよう右側の窓から顔を覗かせている女と長く伸ばされたその手には、ランプが握られ、その下の惨状を照らし出している。その女顔の下には怪我をした足を引き摺りながらそのランプの灯火を見つめる胸をはだけた女がいる。そして、右側には、小さな窓に向かって両手を上に突き出しながら燃え盛る火の井戸の中から悲鳴を上げて助けを求めているかのような女がいる。しかし、誰も助けには来ない絶望感だけが漂っているようだ。そして、牡牛の顔と馬の顔の間の暗闇の中に白い背骨を持つ鳥が力の限りを尽くして天井に向かって羽ばたきながら声なき叫びを上げている。

ドラ・マールの制作記録写真以外にも、ピエール・カバンヌ（2007=2012）や、アラン・セール（1979=2016）そして、荒井信一（1991）によれば、ピカソ自身が『ゲルニカ』制作中に、多くの友人・知人などの来訪者がアトリエに入ることを許可したという。その時のアトリエには、おびただしい数のゲルニカの習作や下絵のスケッチが床に散らばる中でピカソがシャツ姿で、制作中のゲルニカに緋色の彩色を施してみたり、紙ナプキンでコラージュをするなどの試行錯誤を重ねながら集中的に作品制作に挑んでいた様子が語られている。最終的には、現在の色彩を排除されたモノ・トーン（monotone）な白と黒と灰色の彩色がなされた『ゲルニカ』が誕生したのだった。



## 5) 『ゲルニカ』がもつ意味の多義性と抽象性をめぐって

ここでまずは、ゲルニカが持つ多義性について検討してみよう。『ゲルニカ』は白黒のモノトーンだからこそ鑑賞者には、空爆により多くの市民の血が流れ生命が失われたゲルニカの惨劇にたいするピカソの抱いた「哀悼と怒りの感情」が迫ってくるようだ。そして、ただ沈黙する牡牛は、もしかすると、闘牛の国スペインを意味しているのか。背中に槍が突き刺さりその後ろにバックリと空いた傷跡をもつ嘶く馬の口からは、空爆を受けたゲルニカ市民の悲鳴が聞こえてくるようだ。そして、手を伸ばしてランプを掲げる顔をのぞかせる女性とそのランプに導かれるかのように足を引きずる女。ランプは、微かな平和への希望の灯火なのか。さらに、両手を天空に広げながら炎の井戸で助けを求める女は、人間の愚かさへの挑戦状なのか。そして馬の下に倒れる兵士の手が握る「折れた剣」は、戦争の無意味さを表現しているのか。「花」は、生命の復活を意味するのか。叫びながら暗闇を上昇する鳥は一体何を意味しているのか？もしかすると、不死鳥なのか？

キリスト教の聖書の物語を描く西洋絵画の宗教画には、それぞれに描かれるアイコンに、宗教的な意味が与えられている。宗教画には、文字の読めない市民に向けて聖書の理解を促進させる役割が担わされていたからなのだ。

しかし、芸術の鑑賞法の基本は、「考えるものではなく常識を疑い、ただ感じるものなのだ」という言葉を思い出す。本稿は『ゲルニカ』についての美術評論がその目的ではないが、感じたことについて筆者なりの言葉（要約）を記しておきたい。

本稿における『ゲルニカ』の多義性への解釈は唯一つだけである。つまり、各部分に描かれている抽象的造形の意味へのこだわり（判断）を停止かつ排除（＝「現象学的還元」）して見えてきたことは何かについてだ。それは、このピカソが創作した『ゲルニカ』は、「戦争文化」が産み出した人間の愚かさを断固として糾弾しながら、平和をもたらす「福祉文化」の誕生（胎動）を生み出す「文化」という母体と「福祉」という胎児をつなぐアンビリカル・コード（umbilical cord）＝「臍帯」>ではないかという提案だ。

その理由として、私たちは現在、『ゲルニカ』が、80年前のゲルニカ空爆の惨禍にインスピレーションをうけたピカソによって制作されたという事実を知っている。と同時に、2001年のハイジャックされた旅客機がニューヨークの世界貿易センタービル（ツインタワー）に突入破壊するというアメリカ同時多発テロの惨劇（9.11事件）も知っている。20世紀は戦争の世紀だったと言われていた直後、今度は「テロ戦争」と呼ばれる「終わり無き21世紀の戦争」が始まったのだ。その意味で、現代に生きる私たちこそが、永遠に「平和」を「希求し生きる力」を獲得すること、「いのちの尊厳」について考えるために現代的意義を『ゲルニカ』は今も持ち得ているのだと思う。

## 6) パリ万博での『ゲルニカ』の印象と戦争のリアル

西洋史・国際関係論を専門とする荒井信一によれば、パリ万博に展示された『ゲルニカ』が大

衆にどのように受け止められたのかについてスペイン館の設計者セルトの証言を用いて下記のような記述をしている。

人々はスペイン館にやってきた。彼らはこの作品をみたが、それを理解できなかった。多くの人は、それが何を意味するか、分からなかった。しかし、彼らはそこに何かあることを感じた。『ゲルニカ』を見て笑わなかった。黙ってじっと見ていた。私は彼らが通りするのを見守った。

(荒井 1991 : 145)

本稿における『ゲルニカ』の研究的な扱い方は描かれた内容を理解や解釈をする絵画としてではなく鑑賞者が自由に「戦争の本質とは何か」を感じつつ、自問自答する問を投げかける作品なのだと考えてみることにしている。アラン・セールによれば、ドイツの役人がピカソ自身に「『ゲルニカ』はあなたが描いたのか」と尋ねた際に、「いや、あなた方でしょう！」と答えたという逸話まであるのだという。

しかし、大衆が『ゲルニカ』から何を感じとったのかについて、画家アメデー・オザンファン「万博の観衆についてのノート」(『カイエ・ダール』1937年秋冬季号)の文章を引用して荒井は次のように紹介している。

それは彼がある日曜日、スペイン館の喫茶部で小さな机に向かって書き物をしていた時のことである。『ゲルニカ』は彼の前にあった。

「あるプチ・ブルの女性が私のテーブルを通りすぎた。彼女はスペイン戦争の写真展示のある二階から降りてきた。写真では子供たちがキリスト教徒やフランコのムーア人外人部隊によって虐殺されていた。女性は自分の娘にいった。「何とまあ恐ろしい！蜘蛛が首すじをはいおりたみたい、背中が続々するわ。」彼女は『ゲルニカ』を見て子供にいった。「あれが何を現しているかわからないわ。けれど、気持ちひきしまります。変だけど、あれを見ると八つ裂きにされるような気がするの。さあ行きましょう。戦争はおそろしいわ、たいへんなスペイン！」それから彼女は、子供の手を引っ張って、不安げに群衆の中に姿を消した。」

(荒井 1991 : 146)

筆者の見解を再度述べるならば、『ゲルニカ』は、語らない。しかし、見る者の身体感覚をとおして、戦争の恐ろしさとは何かを感じさせる絵画なのだ。

一方、松田健児(2006 : 61)によれば、スペイン館に展示された直後、依頼主であるスペイン共和国政府の一部から、『ゲルニカ』に対して「反社会的で馬鹿げた絵画である」という批判まであったという。またさらに、荒井(1991)も、ル・コルビュジェの発言を引用しながら、その理由について、「(ル・コルビュジェは：筆者注)万博というイベントは大衆に楽しみを提供するものである。大部分の壁画はデュフィの『電気の妖精』のように「きれいな絵」なのに、ピカソ

の『ゲルニカ』は、そうではなく抽象的で極めて難解である」(荒井 1991:148)という点を指摘していたのだという。

しかし、本当にそうだろうか。フランスの有力な美術雑誌『カイエ・ダール』誌の中で、ピカソの友人でもあったクリスチャン・ゼルボォスが、ピカソの『ゲルニカ』について書いた文章について荒井はさらに次のようにも紹介している。

『ゲルニカ』を「この画家のもっとも人間的、もっとも感動的な作品で、かれのもっとも情熱的な感情が集中している」と評した。そして「『ゲルニカ』には、もっとも衝撃的な方法で表現された絶望の世界があり、そこではいたる所に死がある。いたる所に犯罪、混沌、荒廃。稲妻、洪水、台風よりもっと暴力的な災厄、なぜならばそこにあるすべては敵意に充ち、制御を超え、理解を絶しているからだ。そこからは、人間の残酷さゆえに死につつある生物の胸の張り裂けるような叫びがわき上がる。」(荒井 1991:149)

以上のように、『ゲルニカ』についての解釈や理解のされ方について、実にさまざまな視点・立場・時代性の中で誰もが自由に語る資格を有している。つまり、芸術(アート)の力は、時間や言語、性別・年齢・国境の壁を超える力がある。まさに、そのことこそが、『ゲルニカ』に内蔵されている戦争のリアルとは何かというピカソの込めたメッセージの普遍性へとつながるものなのだ。

#### 7) パリ万博後の『ゲルニカ』の運命～アメリカへの「亡命」とスペインへの「帰還」について～

パリ万博終了後、世界は不穏な空気に包まれていった。バビリオンであったスペイン館の解体後、展示されていた作品の多くは製作者の手許に返却された。しかし、ピカソにとって『ゲルニカ』は、依頼主である祖国スペイン共和国のものであるという主張をしていたと言う。

しかし、内戦は深刻化し、フランコ将軍が率いる反乱軍が優勢になる中でピカソの願いとは別に『ゲルニカ』はその安住の地を模索することを余儀なくされた。1938年9月には、イギリスでの巡回展のために船積みされてロンドンに向かった。荒井によれば、10月からイギリス各地で多くの観客(その多くは労働者だったという。)を集めて、スペイン内戦とピカソの作品への関心の高さが示された。しかしその一方、相変わらず、『ゲルニカ』の難解さ、抽象性の高さへの批判する社会主義的リアリズムの批評家(アンソニー・プラント)によれば「難解で、持って回った表現の絵で、真面目な人々には何の意味もない。ピカソはもっと戦争の恐怖を正しく見つめるべきである。普通の人々が解読する時間もエネルギーもないような複雑、深遠な作品を製造することをやめるべきだ」と。(荒井 1991:158)という評価もあった。その後、イギリスのマンチェスターでの展示後、間もなく、『ゲルニカ』はアメリカに向けてフランスのノルマンディー号に船積みされることになった。そして、1939年5月1日に『ゲルニカ』は、ニューヨーク港の埠頭に到着する。ピカソは『ゲルニカ』をアメリカに送り出す条件としてスペイン内戦による難

民救済の基金に設立を上げ、収益の一部をスペインの亡命知識人の救済にあてることであった。なぜなら、1月にはバルセロナがフランコの反乱軍によって陥落し、その後マドリードも同じ運命をたどることで内戦が終結に向かいつつあったからである。

ピカソは、祖国がフランコの独裁政権の時代を迎えることを予感していた。そして、結果的には、9月に第二次世界大戦が勃発し、スペインはフランコの独裁政権下におかれることになった。その意味で、『ゲルニカ』は、第二次大戦中にアメリカに疎開した状態となった。だが、『ゲルニカ』は、アメリカでの巡回展示の際には政治と芸術の問題作としての扱いではなく、現代芸術（モダンアート）を考える素材そして批判の対象としてのその評価が議論されることになった。しかし、時代は戦争のとき（歴史）を迎えつつあり、欧州ではポーランドをはじめ各地の都市がドイツ軍による空爆の惨禍に見舞われ始めた。そのため、ピカソの『ゲルニカ』の歴史的存在意義について誰もが再度、考えるようになったのである。

そしてその後、『ゲルニカ』の所有権について、当時のフランコ政権も1968年からゲルニカをスペイン国家に帰還させる運動をはじめた。しかし、松井によれば、ピカソは、翌年、弁護士（ローランド・デュマ）を通じて次のように伝えたという。

「たしかにフランコ政府は、ピカソに申し出をした。しかし、ピカソはフランコが権力にとどまっている限り、この作品がスペインで展示されることを決して許さないであろう」。

デュマは「スペイン共和国が復活した時に、絵はスペイン共和国の政府に引き渡されるであろう」ともいった……（中略）……ピカソは、1年後の70年11月14日、あらためて署名入りの声明を送った。そしてそこで、「共和国が復活した時に」という言い方に代えて、「スペインで公共の自由（public liberties）が確立した時に」という言い方に変えた。

（松井 1991：174）

その結果、ピカソの意志を尊重する形で、アメリカ・ニューヨーク近代美術館（MoMA：The Museum of Modern Art, New York）に、フランコ政権が倒れてスペインに「自由と民主主義」が回復する1981年までの42年間も留め置かれることになったのである。

スペインへの『ゲルニカ』帰還までの間、1973年にピカソは91歳で逝去する。その2年後にはフランコもその生涯を閉じた。その後、スペイン国会において自由選挙がおこなわれることとなり、『ゲルニカ』帰還のために、連邦議会が以下のような条項を発表した。

「(1) パブロ・ピカソにより描かれた傑作『ゲルニカ』は、40年にわたって強力かつ痛烈な戦争の恐怖のシンボルであった。

(2) この銘記すべき絵画は、普遍的な意味をもつものであるが、一方スペイン人民にとっては、スペイン民主主義を破壊した悲劇的内戦を表したことによって特殊の意味を有している。

(3) スペイン共和国政府のために『ゲルニカ』を描き、同政府の倒壊にあたってはスペイン

の将来のために憂慮したパブロ・ピカソは、スペインの民主主義が回復するまでは、この絵は、ニューヨーク近代美術館の保護下にとどめるべきことを明記した。さらに、

(4) 合衆国とスペインは、友好協力条約とともに結ばれた補足協定で、教育、文化の分野にも協力を拡げることを約束した。

したがって、スペインの政治生活における最近の実り多い発展が継続されることを期待して『ゲルニカ』が近い将来のある時点において、適切な法的手続きを通じて民主的スペインの人民および政府に渡されるべきであるというのが、当連邦議会の意向である。」

(松井 1991: 184-185)

その後、ピカソの遺産相続問題や複雑な返還交渉をクリアしながらようやく、『ゲルニカ』は、ピカソの祖国への帰還が決まり、ピカソ生誕100年記念の1981年10月24日マドリードの『プラド美術館』の別館に嚴重な警護を受けながら展示されることになった。尚、現在は、1992年にソフィア王妃芸術センターへの寄託という形で展示されている。

まさに、ゲルニカ空爆の惨禍から誕生したピカソの『ゲルニカ』が自由を求めるためのファシズムへの抵抗と民主主義のシンボルとして位置付けられることになった。

さらに、イラク戦争のときにはスペインでの反戦ポスターのシンボルとしても使われたのである。

つまり、『ゲルニカ』の亡命とスペインへの帰還はピカソの意図したゲルニカ空爆への怒りと哀悼を表現する抽象的な絵画として「戦争文化」への抵抗であり抗議声明の象徴的存在ともなった。現代でも戦争が終わらない世界に対する「平和を希求すべき使命(ミッション)」を担う希望としての「福祉文化」を生み出し、時代を超えて戦争に抗する平和を考えるためのアンビリアル・ケーブル(すでに、コードでなく、具体的な平和と福祉の文化思想を形成する人と人との強く結びつける絆としてのエネルギー供給源)の役割がピカソの『ゲルニカ』という作品に宿ったのだと提案しておきたい。

### Ⅲ. 「戦争」に抗する「福祉文化」の意義～『ひとはなぜ戦争をするのか』より～

#### 1. アインシュタインとフロイトの書簡集『人はなぜ戦争をするのか』について

##### ～『書簡集』誕生の経緯とその運命～

20世紀の「知」を代表する物理学者アインシュタイン(1879～1955)と精神分析学の創始者フロイト(1856～1939)の「往復書簡」としてA・アインシュタイン&S・フロイト(浅見昇吾訳)(2016)『ひとはなぜ戦争をするのか』(講談社学術文庫/原本は、2000年に花風社より訳本が刊行された。)があることを知った時、筆者はとても大きな衝撃を受けた。その理由は、その書簡の内容(テーマ)が「ひとはなぜ戦争をするのか」という問いをアインシュタインが、フロイトに投げ掛けていたからである。訳者あとがきによれば、この発端は、1932年に国際連盟の国際知的協力機関からアインシュタインへなされた依頼であったという。その依頼は、「今の文

明でもっとも大事だと思われる事柄を取り上げ、一番意見を交換したい相手と書簡を交わして下さい」というものだった。そこで、アインシュタイン（当時：53歳）が取り上げたテーマが「ひとはなぜ戦争をするのか？」であり、議論の相手に選んだ人物が精神分析学の創始者フロイト（当時：76歳）であった。

アインシュタインからフロイトへの手紙は次のような文面で始まっている。

フロイト様  
1932年7月30日ポツダム近郊、カプートにて  
あなたに、手紙を差し上げ、私の選んだ大切な問題について議論できるのを、たいへん嬉しく思います。……（中略）……「人間を戦争というぐびきから解き放つことはできるのか？」これが私の選んだテーマです。技術が大きく進歩し、戦争は私たち文明人の運命を決する問題となりました。このことは、いまでは知らない人がいません。問題を解決するために真剣な努力も傾けられています。ですが、いまだに解決策が見つかりません。何とも驚くべきことです。私のみるところ、専門家として戦争の問題に関わっている人すら自分たちの力で問題を解決できず、助けを求めているようです。彼らは心から望んでいるのです。学問に深く精通した人、人間の生活に通じている人から意見を聴きたい、と。（Einstein 1950=2016：9-10）

このときすでに物理学者であるアインシュタインは、第一次世界大戦後の世界情勢について明らかな危惧を抱いていたことが彼の文面から読み取ることができる。

そして、彼が「人間を戦争のぐびきから解き放つことができるのか」について政治的・国家的な問題としてではなく人間の生活に潜む攻撃性という心の問題と認識した上で、人間の心（無意識）の問題を探求した精神分析学の創始者フロイトへ質問の手紙を送ったのであった。

しかし、この『戦争論』とも呼ぶべき書簡は、その後のヒトラー率いるナチズムが台頭する戦禍の中で埋もれてしまった。書簡の交わされた翌年（1933年）以降、ナチス政権が誕生し、ユダヤ人を強制収容所へ追い詰めていくまさに戦争の時代を迎えていたのであった。アインシュタインもフロイトもユダヤ系の人間であるため、危険思想の持ち主として自宅搜索をうけ暗殺や強制収容所送りの危険な状況におかれていた。そのため、アインシュタインはアメリカへ、フロイトはイギリスのロンドンへ亡命することになる。

そんな戦争をめぐる激動の時代の中で、彼ら2人の書簡はナチズムが跋扈する戦争の時代の中で握りつぶされた状態となったのだと訳者同様に筆者も考えている。歴史を振り返るならば、20世紀は、第一次世界大戦（1914年）、ゲルニカ空爆・日中戦争（1937年）、第二次世界大戦（1939年）、太平洋戦争（1941年）、広島・長崎に原爆投下（1945年）、朝鮮戦争（1950年）、ベトナム戦争（1965年～1975年）を始め、イラン・イラク戦争（1980年）、湾岸戦争（1991年）等々、主だった戦争を列挙するだけでも世界のどこかで戦争という惨禍に市民が見舞われることを余儀なくされていた事実を知ることができる。

訳者あとがき中で浅見昇吾（2000）は、次のように述べている。

21世紀、人間は戦争をなくすことができるのだろうか。否、戦争をなくすように努力しなければならない。本書を読めば、このような気持ちに駆られるに違いない。20世紀は「戦争の世紀」「殺戮の世紀」だった。あまたの戦火があがり、かつてなら想像もできなかった数の人間が命を落としていった。20世紀を終え、21世紀を生きようとしている今、2人の戦争論を読み、20世紀の英知を手にも、新たな歩みを始めなければならない。そう思えてならない。

(浅見 2000=2016:60)

この記者である浅見の願いは、翌年(2001年)のアメリカ同時多発テロとその後のイラク戦争(2003年)によって虚しく裏切られてしまう結果となった。しかし、彼が翻訳したアインシュタインとフロイトによる『ひとはなぜ戦争をするのか?』という書簡集の存在意義は、現代において日々増している。なぜなら、人間というモンスター(怪物)の行く手を阻む方法について、「エロス(生/愛)の欲動」と「タナトス(死の欲動)」を説いたフロイト自身が、アインシュタインに、「戦争について人間の深層心理を腑分けしながらその理由と戦争をどのように阻止すべきなのか」について卒直な書簡を返しているのだから。

それでは、次にアインシュタインからの問いかけに応答したフロイトの見解を検討し、最後に「福祉文化」が持つ現代的意義とは何かについて考えてみたい。

## 2. アインシュタインからの手紙に対するフロイトの返信書簡の内容

フロイトは、アインシュタインからの手紙を読んで非常に驚いたことを表明している。アインシュタインからの書簡に託された先に述べた「人間を戦争というくびきから解き放つために、いま何ができるのか?」というテーマはフロイトの予想を裏切るものであった。その理由として、彼はそのような政治家が取り組むべき実務的な問題に答えることは自分には不可能だという第一印象を受けたことを極めて率直に答えている。しかし、フロイトは、そのテーマの本質について、次のように理解したのだとアインシュタイン宛の手紙(1932年9月ウィーンにて)の中で述べている。

しかし、その後気がつきました。あなたは自然科学者や物理学者として問題を提起したのではない。人間を深く愛する一人の人間として、国際連盟の呼びかけに応え、この問題を投げかけたのだ、と。……(中略)……また、こうも気がつきました。実務的な提案を期待されているわけではない。心理学的な観点から見て戦争を防止するにはどうすればよいのか、それだけを述べればよいに違いない。

(Freud 1950=2016:22-23)

そして、精神分析学の創始者・泰斗であるフロイトは、精神分析理論における人間の心(無意識)に宿る欲動理論を展開する。つまり、戦争は、一見すると極めて国家間の権力闘争をめぐる

政治的な問題のように映る。そして、戦争を防止する（＝人間の基本権利（人権）の保障）ためには「法（権利）による支配」が必要だがそのためには「権力という暴力」もまた同時に伴ってくることを指摘している。（浅見 2016：24）

フロイトは、人と人のあいだの利害の対立は、原始的な方法としてその基本は暴力によって解決されるものだと言明する。なぜなら、動物はみなそうやって決着をつけている。人間も動物であるのだから、「暴力」で決着をつけて来たのだという。しかし、社会が発展するにつれて剥き出しの「暴力による支配」から「法（権利）による支配」へと変化してきたのだという。そのためには、人間の心に新たな条件が芽生えなければならないとした。それは、多数の人間による意見の一致と協力が長く継続する安定したものである必要があるのだと。

さらに、アインシュタインの手紙の中で触れられていた「人間には本能欲求が潜んでいるのではないか。憎悪に駆られ、相手を絶滅させようとする欲求が潜んでいるのではないか。」（Einstein 1950=2016：15）についての回答として次のような精神分析の理論を展開する。

精神分析は暗中模索しながら、欲動理論を作り上げ、いまではこう考えるようになっていきます。人間の欲動には、二種類ある。一つは、保持し統一しようとする欲動。プラトンの「饗宴」に出てくる「愛（エロス）」の話になぞらえ、これをエロスの欲動とよぶことができる。場合によっては、性的欲動と呼んでもよい。（当然、ここで言われている「エロス」は、一般に言われる「性（エロス）」という言葉よりも幅広いものを意味する）。もう一方の欲動は、破壊し殺害しようとする欲動。攻撃本能や破壊本能という言葉で捉えられているものである。

（Freud 1950=2016：38-39）

この精神分析学の欲動理論の結論は、エロスの欲動は「生の本能（欲動）」へ、破壊欲動（攻撃性）は「死の本能（欲動）」が外の対象に向けられたものという考え方となる。

しかし、この考え方は、一方が「善」であり、他方が「悪」であるというような対立する概念ではないとフロイトは警告を発する。それぞれは切り離すことができない必要不可欠なものだと断言するのである。人間の行動は極めて複雑多様であり、他者の些細な瑕疵につけ込んで大げさな言説を振りまきながら攻撃の対象とする（例えば：いじめ）などのようにさまざまなハラスメント行為の中に垣間見ることができる。それは、そうすることで自分の存在を相手より優位に立ちたいという支配欲を持つ歪んだコンプレックスを抱えた人間がいかに多いことかと感じることがある。戦争のきっかけも実はそれとよく似ているとも言える。

そしてフロイトは、アインシュタインへの問いかけに対して、次のようにも答えている。

人間の攻撃性を完全に排除することが問題なのではありません。人間の攻撃性を戦争という形で発揮させなければよいのです。戦争とは別のはけ口を見つけてやればよいのです。

ですから、戦争を克服する間接的な方法が求められることとなります。そして、精神分析の



神話的な欲動理論から出発すれば、そのための公式を見つけるのは難しくはないのです。人間がすぐに戦火を交えてしまうのが破壊欲動のなせる業（わざ）だとしたら、その反対の欲動、つまりエロスを呼び覚ませばよいこととなります。だから、人と人との感情と心の絆を作り上げるものは、すべて戦争を阻むはずなのです。（Freud 1950=2016：46）

フロイトは、アインシュタインに向けて戦争を阻止するための精神分析的な視点からの回答を提示してみせている。戦争の根源に存在する人間の破壊欲動に対抗するためには、エロスの欲動を起動させ「人と人を結びつける絆」を形成することが戦争を阻む力になると断言する。しかし、フロイト自身もそれは簡単なことではないことは承知していた。それでも、人間の感情の絆という一体感や帰属意識は、人間の共通性・類似性を共有することでそれは可能となり、人間社会を力強く支えるものだと主張している。

そして、フロイトは、アインシュタインに次のような問題提起をする。「私たち（平和主義者）はなぜ戦争に強い憤りを覚えるのか？あなたも私も、そして多くの人間が人生の数多くの苦難を甘んじて受け入れているのに、戦争だけは受け入れようとしないのはなぜなのか？」（Freud 1950=2016：49）に彼なりの答えを提示しているのである。

それは、「戦争は自然世界の掟に即しており、生物学的なレベルでは健全であり、現実には避けがたいものなのですから！」（Freud 1950=2016：49-50）とさえ断定する。

そして、アインシュタインも含め平和主義者が、戦争を反対する理由について以下のような説明を与えている。

私の間に対してすぐ思い浮かぶ答えは、次のようなものでしょう。  
なぜなら、どのような人間でも自分の生命を守る権利を持っているから。  
なぜなら、戦争は一人の人間の希望に満ちた人生を打ち砕くから。  
なぜなら、戦争は人間の尊厳を失わせるから。  
なぜなら、戦争は、人間が苦勞して築き上げてきた貴重なもの、貴重な成果を台無しにするから。  
それだけではありません。いま戦争に勝利しても、かつてのように英雄になれるわけではないのです。破壊兵器がこれほどの発達を見た以上、これからの戦争では、当事者のどちらかが完全に地球上から姿を消すことになるのです。場合によっては、双方がこの世から消えてしまうかもしれません。（Freud 1950=2016：50-51）

このように、フロイトは、戦争に反対する理由を列挙してみせている。そして戦争に反対する平和主義者である人間は、「こころと体の奥底から戦争への憤りを覚える」からであると看破する。そして、戦争を阻止するための最後の切り札としてフロイトが提案したものは、「文化」の発展（成熟）であった。つまり、文化の発展が人間の心のあり方に変化をもたらすというのだ。つまり、「文化の力」が人間の欲動をコントロール、つまり、心と体の全体の変化をもたらすの

だと。

フロイトの戦争阻止のための「文化」についての考え方を少し長くなるが以下に引用し、筆者なりの見解を述べておくことにする。

文化が生み出すもっとも顕著な現象は二つです。一つは、知性を強めること。力が増した知性は欲動をコントロールしはじめます。二つ目は、攻撃本能を内に向けること。好都合な面も危険な面も含め、攻撃欲動が内に向かっていくのです。文化の発展が人間に押しつけたこうした心のあり方—これほど、戦争というものと対立するものはほかにありません。だからこそ、私たちは戦争に憤りを覚え、戦争に我慢がならないのではないのでしょうか。戦争への拒絶は、単なる知性レベルでの拒否、単なる感情レベルでの拒否ではないと思わるのです。……（中略）……では、すべての人間が平和主義者になるまで、あとどれくらいの時間がかかるのでしょうか？この間に明確な答えを与えることはできません。けれども文化の発展が生み出した心のあり方と、将来の戦争がもたらすとてつもない惨禍への不安—この二つのものが近い将来、戦争をなくす方向に人間を動かしていくと期待できるのでないのでしょうか。……（中略）……しかし、私たちにもこう言うことは許されていると思うのです。文化の発展を促せば、戦争の終焉へ向けて歩みだすことができる！

(Freud 1950=2016 : 54-55)

フロイトは、戦争に抗うために人間ができることは「文化の発展」であると断言する。この彼の言説は、人間の持つ「死の本能（タナトス）」を提示したペシミスティックなフロイトにしては、極めて意外な見解であるという印象を受けるのではないだろうか。

アインシュタインからのフロイトへの手紙は、1932年7月30日に投函されており、そのフロイトの返信は、同年9月にウィーンで書かれている。しかし、この年は優生思想や人種差別主義・ファシズムに基づく選民思想（ナチズム）のナチ党・アドルフ・ヒトラー（1889～1945）の登場（ドイツ国首相に就任・独裁政権）の前年でもあり、時代は些かきな臭い戦争を予感させる空気が漂っていたはずなのだ。

そんな時代の空気を敏感に感知したアインシュタインからの「問いかけ（戦争を阻止する方法とは何か?）」に対するフロイトの返信が「人類の文化の発展（成熟）」であるという結論は、まさに、これは晩年のフロイトが人類の未来に託した希望の灯火というべきなのかも知れない。

## IV. 戦争に抗うための「福祉文化」とは何か、そして今後の課題

### 1. 福祉文化とは何か

福祉（welfare）とは何か。それは、人間にとって「健康で幸せな生活（幸福）」のことであると認識されてはいる。そして、この福祉概念の基本について日本では、憲法25条（生存権保障）「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」ということで学ぶことも多い。しかし、「健康」については、WHOの健康の定義「健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、

肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいいます。」(日本WHO協会訳)が明示されることはあっても、社会福祉の抱えるさまざまな課題について「福祉と文化」の視点についての言及はほとんどなされていないのが現実ではないだろうか。その中でも「日本福祉文化学会」は、創設(1989年)の当時からこの問題について積極的に取り組んできている。

この日本福祉文化学会の創設者の一人である一番ヶ瀬康子<sup>(1)</sup>(1927～2012)は、「福祉文化」について次のように語っていた。

この言葉(「福祉文化」：筆者追記)の意義は、もっと深くとらえることが重要である。この言葉をより本質的にとらえるならば、きわめて深い、そして人間の文化の創造の原動力に迫る視角があると考えられるからである。というのは、“福祉”自体が、単に生存を認めるだけのものから人間らしい生活を保障するものになり、さらに一人ひとりのその人の自己実現の援助へと焦点が移ってきている今日、一人ひとりの真の自己実現こそ、新たな文化創造につながるものがあるからである。つまり、文化遺産を受け身で楽しむだけでは、文化とはいえない。文化とは、創り出すという側面が重要である。その点からいうならば、新たな社会の価値観、人間観が、その根底にあることが不可欠となる。(一番ヶ瀬 1997: 6-7)

一番ヶ瀬の「福祉文化」の考え方は、人間の「生存権保障」に留まらず「人間らしい生活保障」から「自己実現」への援助を支援する「文化の創造」へとその焦点が移り、新たな文化の創造こそが重要であることを指摘している。そして、そこには新たな社会的価値観と人間観が必要不可欠となると述べている。言い換えるなら、人間らしい生活を破壊し、個人の自由な生き方の変更を余儀なくし、「文化の創造」を阻止する「戦争文化」と平和を希求するべき「福祉文化」は共存し得ないものだと考えるべきではないだろうか。戦後誕生した現在の「日本国憲法」の精神と「福祉文化」の基本方針は一致しているのだと筆者は考えている。

## 2. 戦争に抗うための福祉文化の視点について

宮澤賢治(1896～1933)は、『農民芸術概論綱領』<sup>(2)</sup>(1926)の中の序論の中で「世界ぜんたいが幸福にならないうちは、個人の幸福はありえない」と述べた言葉は誰もが知っている名言だろう。そして、まさに「平和でなければ真の福祉は実現できない」ということと「福祉文化思想」の基盤はまさに通底している。

戦争をして人間が幸福になることはありえない。軍備を拡張して「核抑止力」などという言説に惑わされてはならない。フロイトは、人間の「攻撃性欲動」を外ではなく内に向けてさらに昇華させることによって「生(エロス)の本能(欲動)」の発展、つまり戦争を阻止するためには「文化の発展と促進」を願っていた。本稿において、ピカソの『ゲルニカ』とアインシュタインからの問いかけに対するフロイトの見解をふまえて、「戦争に抗うための福祉文化」の視点に必

要な4つの要件を試論的に提示しておきたい。

- 1) 福祉文化は、人間らしい文化（生活・芸術・科学）を創造する立場にたち、文化を破壊する「戦争文化」に反対する立場を堅持する。つまり、戦争は一瞬にして、市民の生活を破壊し、多くの障害者・戦争孤児・寡婦を生み出す非福祉的行為に他ならない。
- 2) 戦争は、権力による人間の自己実現を阻害する暴力的行為（権利侵害）であるという認識と理解の重要性。
- 3) 戦争を生み出した「歴史・時代背景」の本質を読み解く力の必要性。
- 4) 正義や平和のため国家を守るための戦争は存在しないという現実への洞察力。

戦争を阻止するための「福祉文化」は「平和を願ったり、祈ったり」するだけでは実現し得ないのだと考えている。戦争の惨禍を直視する力（視点）を持つことで、平和に向けた福祉を実践し、「文化」の中に「福祉」の魂を宿さなければならない。まさに、ピカソの『ゲルニカ』の中で戦争の惨禍を照らし出した「ランプ」の灯火のように。

#### おわりに：福祉文化の今後の課題について

最後に、本稿では改めて「福祉の文化実践」として果たすべき役割の一つに「戦争文化」に抗う立場を堅持することであることを確認してきた。つまり、戦争文化と福祉文化の共存は相容れない矛盾した関係にある。そして、ピカソの作品『ゲルニカ』やアインシュタインからの「問い」へのフロイトの見解を通底する「平和」への自覚と人間の持つ他者への「痛み」への共感や想像力こそが平和を実現するための「福祉文化」構築の実践的意義であることを提示しておきたい。

つまり、戦争文化という愚かな人間が生み出す行為の「抑止力（＝平和の盾）になるべき役割と責任が、「現代の福祉文化」の果たすべき役割であり責任でもあることを厳しく問われている時代の中を今まさに私たちは生きている。

#### 注

- (1) 一番ヶ瀬康子（1927～2012）が「福祉文化」を提案し論じた（単著『福祉文化へのアプローチ』ドメス出版、1997年）と編著『福祉文化論』有斐閣、1997年が、今日、福祉文化を考える基盤として知られている。
- (2) 宮澤賢治（1926）『農民芸術概論綱領』青空文庫

#### 引用・参考文献

- 荒井信一（1991）『ゲルニカ物語—ピカソと現代史』岩波新書

- 浅井春夫氏(2016)『戦争する国、しない国：ふくしの思想と福死の国策』新日本出版社
- Cabanne, Pierre. (1979) *Le siècle de Picasso, 3: Guernica et la guerre (1937-1955) & Le siècle de Picasso, 4: La gloire et la solitude (1955-1973)*, Éditions Denoël (=2016 ピエール・カバヌ (中村隆夫訳)『続 ピカソの世紀：ゲルニカと戦争、そして、栄光と孤独・1937-1973』西村書店)
- 海老坂武(2018)『戦争文化と愛国心：非戦を考える』みすず書房
- Einstein Albert & Freud Sigmund (1950) *Letter to Sigmund Freud by Albert Einstein*, The Hebrew University of Jerusalem, Israel/*Brief an Albert Einstein. Sigmund Freud, Gesammelte werke, chronologisch geordnet*, Imago Publishing Co., Ltd. (=2016 A・アインシュタイン/S・フロイト(浅見昇吾訳『ひとはなぜ戦争をするのか』講談社学術文庫)
- Erikson, Erik H. (1975) *Life History and the Historical Moment*. Norton & Company, Inc. New York.
- 保坂正康(2015)『戦場体験者：沈黙の記録』、筑摩書房
- 原田マハ(2018)『暗幕のゲルニカ』新潮文庫
- 一番ヶ瀬康子(1997)『福祉文化へのアプローチ』ドメス出版
- Kardiner, Abram with the collaboration of Herbert Spiegel (1947) *War Stress and Neurotic Illness*, Paul B. Hoeber & Brothers, New York, London. (=2004 エイブラム・カーディナー(中井久夫・加藤 寛 共訳)『戦争ストレスと神経症』みすず書房)
- 加藤陽子(2016)『戦争まで：歴史を決めた交渉と日本の失敗』朝日出版社
- 加藤典洋(2015)『戦後入門』ちくま新書
- 木田元(2000)『現象学の思想』ちくま学芸文庫
- 益川敏英(2015)『科学者は戦争で何をしたか』集英社新書
- むのたけじ/菅聖子(2015)『100歳のジャーナリストからきみへ』(全5巻)汐文社
- 中村江里(2018)『戦争とトラウマ：不可視化された日本兵の戦争神経症』吉川弘文館
- 日本福祉文化学会編集委員会(編集代表：永山誠)(2011)『福祉文化の源流と前進』明石書店
- 岡村多佳夫(2009)『ピカソ：巨匠の作品と生涯』角川文庫
- 大田昌秀・山城紀子等(2015)『戦争と福祉についてボクらが考えていること』本の泉社
- 大高安二郎監修・松田健児(2006)『ピカソ：生涯と作品』東京美術
- Serres, Alain (2007) *Et Picasso peint Guernica*, Rue du Monde (=2012 アラン・セール(松島京子訳)『ゲルニカ：ピカソ、故国への愛』富山房インターナショナル)
- 東京大空襲・戦災資料センター編(2009)『東京・ゲルニカ・重慶：空襲から平和を考える』岩波書店
- 山本七平(2018)『「空気」の研究』文春文庫
- 吉田裕(2005)『日本人の戦争観～戦後史のなかの変容』岩波現代文庫
- 吉田裕(2017)『日本軍兵士：アジア・太平洋戦争の現実』中公新書

\*\*\*\*\*

尚、本研究は、2017年度の日本福祉文化学会の「福祉文化研究・調査プロジェクト＝戦争文化に抗する福祉文化思想の基盤研究」(研究代表：結城俊哉)の研究助成を受けたものである。